

土木学会論文集が変わります

—電子ジャーナル、CD-ROM化と投稿・査読システムの電子化—

論文集編集委員会

土木学会論文集は、1961（昭和36）年に土木学会誌から独立し、1984（昭和59）年には現在の部門制論文集に変わり、途中名称を「論文報告集」に変えた時期もありましたが、一貫して、土木技術・土木工学研究成果を発表する代表的かつ最高峰の場としての役割を果たしてきました。すでに、800号近くの発刊の歴史をもち、毎年約500編の論文が掲載され、その量は6,000ページにも達しています。これは、同規模の他学会の論文集を上回るものであり、土木学会の研究活動の旺盛さを物語っています。

学会論文集は学術成果を社会に発信するという重要な社会貢献の役割を担っており、「1人でも多くの方に論文を見ていただけるようにするのが使命と考えております。」しかしながら、どの学会にお

いても共通の悩みである、論文集購読者数の減少が土木学会においても確実に進行しております。このような状況の中で、今後とも安定的に高い質の論文集を存続させるためには、論文集としての「魅力度」をさらに高めるための抜本的な対応措置をとるべき時期にあると考え、この1年あまり精力的に検討を重ねてまいりました。その結果、インターネットテクノロジーを駆使することによる論文へのアクセス性、および査読・掲載までの迅速性の向上が1つの大きな鍵と考え、

- ①論文集をJ-stage（（独）科学技術振興機構の運営する科学技術情報発信・流通総合システム）に電子ジャーナルとして掲載する。
- ②論文集購読会員、法人・特別会員には常時、閲覧できるようにし、その他の会員には制限をつけてアクセスできるようにする。また、

非会員にも時間を置いて開放する。

- ③従来の紙媒体による論文集はCD-ROM形式（全部門論文収録）に切り替え、論文集購読会員、法人・特別会員に送付する。
 - ④論文の投稿、査読プロセスを完全に電子化し、論文掲載までの時間を短縮する。
- を実施することにいたしました。

電子ジャーナル化の最大のメリットは、論文へのアクセスが容易になることから、幅広い読者層の獲得、高い頻度の引用につながることです。事実、土木学会員からの電子ジャーナル化を望む声は非常に大きく、また、理工医系の主要な国際学術誌では電子ジャーナル化が急速に進行中です。また、参考文献のクロスレファレンス（引用文献をその場で閲覧可能）、カラー写真の掲載も容易となります。電

表1 電子ジャーナル導入に伴う、論文集購読会員、法人・特別会員、一般会員、非会員に対するサービスモデル（予定）

	論文集購読会員	法人・特別会員	一般会員	非会員
概要(メリット)	CD-ROM版(全部門)およびJ-stageの個人アクセス権を得る。年会費4,000円	CD-ROM版(全部門)およびJ-stageのサイトアクセス権を得る	一定期間の後、インターネット上ですべての論文を閲覧できる	一定期間の後、インターネット上ですべての論文を閲覧できる
J-stage	更新頻度	3ヶ月に1回	3ヶ月に1回	3ヶ月に1回
	題・概要	閲覧可	閲覧可	閲覧可
	本文	閲覧可	閲覧可	1年後、閲覧可
	認証方法	ID・パスワード(個人に付与)	IPアドレス(団体に付与)	ID・パスワード(個人に付与)
CD-ROM版	内容	全部門論文を収録	全部門論文を収録	—
	発行頻度	3ヶ月に1回	3ヶ月に1回	—
	配付部数	1部	1~3部(従来と同じ)	—
紙版	希望者に配布(有料)	希望者に配布(有料)	希望者に配布(有料)	—

電子ジャーナル化と並行して、電子投稿・査読システムを導入することにより、投稿から掲載までの期間の短縮をします。現在、投稿から掲載までに平均1年を要していますが、2、3か月は短くしたいと考えております。投稿者は、随時、自分の論文の査読進行状況を把握することも可能となります。

電子ジャーナルは2006年1月から刊行し、同年4月からは紙媒体の論文集の代わりにCD-ROM版の論文集を配布します。電子投稿については2005年秋から開始し、電子査読システムは2006年6月から導入する予定です。

■土木学会論文集編集委員会 電子化検討WG

顧問	フジノヨウゾウ	藤野陽三
主査	ツカノトシ彦	柄登志彦
委員	ウラノケイ	浦瀬 太 郎
委員	ウラノケイ	浦瀬 太 郎
委員	マツモトタカシ	松本 高 志
委員	ミヤタカズ	宮 田 和
委員	ヨシダヒデアリ	吉 田 秀 典
オブザーバー	シモムラタクミ	下 村 匠

今まで、慣れ親しんできた紙媒体の論文集ならではのよさがあることは十分認識しております。これまでの論文集を存続させたまま電子ジャーナルを新たに加えるという方式も当然、検討いたしました。しかし、電子ジャーナル化、投稿査読電子化システムの開発・運営・保守に要する費用を考えますと、学会の今の財政状況の中で負担できるものではありません。将来的には、電子化することで大幅な経費削減が期待でき、新しい展開が可能となります。この辺の事情はご理解いただけるものと思っております。

これまで個人の論文集購読会員の多くは、購読費（一部門年4,000円）の関係から、関心の高い部門のみを購読されていたかと思えます。CD-ROM化により、従来の一部門分に相当する購読費ですべての部門の論文を購読できることとなります。また、論文集購読会員であれば、いつでも、どこからでも電子ジャーナルにアクセスできます。会社や官公庁、学校などの法人会員や特別会員であれば、その組織に属している方は、職場や

図書室で電子ジャーナルを閲覧が可能になります。また、論文掲載への負担金も順次下げていくことを考えております。電子化のメリットの大きさをいろいろな場面で感じていただけたらと思っております。なお、紙媒体を希望する会員や特別会員には、簡易印刷による論文集を有料配布することで対応するにしております。

今回の論文集の電子化は、論文集としてのステータスを上げつつ、会員にとって、より身近なものとするための改革の1つです。電子ジャーナル化でいろいろな面において大きな変化が現われてくるのが予想され、近い将来、投稿料や論文購読料による費用負担の方法など、論文集そのものの仕組みが変わらざるを得なくなるかもしれません。今後とも、いろいろな改革を実行していきたいと考えておりますので、会員の皆様からの活発なご意見とともに、新しくなる論文集にこれまで以上のご支援をお願いする次第です。

論文集編集委員会 委員長
藤野陽三